



現状について

今の戦争中、これほどまでに故郷で起きていることに心を奪われたことは、かつてなかった。数週間前から重要な戦場で超人的な格闘が見られている。ずっと以前から幾度となく予告されていた敵国の共同攻勢がそのまっただ中にあるのだ。各所で故国の勇敢な兄弟達が居並ぶところに、圧倒的な兵力が殺到している。これまで無かったような激しい戦闘が東部でも西部でも伝えられ、イタリア戦線からも絶えず新しい攻撃の報道が伝えられる。

ほんの数日前まで、まるで攻勢がゆるむかに見えたのに、新たな攻勢が再び始まった。

ロシア軍がこれまでに、ブコヴィナ、ガリシア、南ロシアで少なからぬ地歩を進めたことは間違いない。ロシア側から伝えられる捕虜の数については、当然ながら眉唾ものだろうが、ロシア軍が少なからぬ成果を収めた

という事実から目をそらすのは誤りであろう。願わくば、ロシア側の人的損害が重大で、その攻撃に中核的な迫力が無くなっていると良いのだが。ドイツ側からの報道は、残念ながら見られない。

西部戦線ではフランス軍がテロンヌ方面への地歩を獲得した。これに対し、イギリス軍の攻撃はほんの少しの前進を見ただけのようだ。なのに非常に重大な犠牲を払ったのである。

ロシア側の報道によると、ロシア軍の司令部はドイツ軍の反撃がもうすぐ始まると考えている。これと関連して、昨年5月わが軍が勝利を収めたときの指揮官、フォン・マッケンゼン元帥の名前が挙がっている。ひとつ確かなことは、わが軍が新たな難事業を目の前にしていることである。望むらくは、願いどおりの成果が得られますように。

この戦闘が、今回の戦争を決するものとなるであろうか。それは誰にもわからない。いずれにせよ、敵を押し戻すことに成功すれば、平和に大きく近づくことになるだろうと考えて間違いない。

われわれにとって重要なことは、この困難な時代に雄々しく耐えることであり、戦場からの報道がしばらくの間良いものでなかりと、わが大義を信じ、戦争が最終的に上首尾に終結すると信じることである。

北海戦ふたび

以下の記事は、ニューヨークの7月4日付「ザ・ワールド」紙からの引用であるが、読者諸氏にはアメリカ海軍一将校の意見を表すものとして、特別の興味を引くものであろう。(編集部)

最新のイギリスの報道が明瞭に示すところでは、ビーティ中將はドイツ巡洋艦部隊を分断しようと努める中、ドイツ戦艦部隊とばったり出くわしてしまったのである。彼は脱出しようと試みたが、ドイツ側の戦術が長け

ていて、果たせなかった。ドイツ軍の激しい砲撃によって、そのすばらしい巡洋戦艦と駆逐艦は粉碎されてしまった。

私の判断する限り、ドイツ軍の長所は情報伝達が優れていて（この点についてはツェッペリン号は少なからぬ寄与をしている）、さらにより良い戦術を持ち、より良い場所に立っていた点にある。

イギリス艦隊の主力が接近するとドイツ軍は、当然のことながら退却した。これはそうしなければならないことである。艦隊司令官は誰しも、もしその場にいたとすれば、同じ事をしたであろう。海軍本部の報告を含むロンドンの報告書によると、ビーティ提督は虎穴に入り込んでしまったことを発見するや直ちに同じ事をしたのである。

この戦術は当然のことであって、ドイツがイギリスの大艦隊に本当に脅威を与えようと意図するならば、この戦術はくり返し行わなければならない。われわれはイギリス海軍軍人に対し大いに敬意を払うものであるが、公平に言ってイギリスのブルドッグは戦いが巧みではない。それはすばらしく強くて、どのような戦いであれ、戦闘に入ったら最後までやり通すだろう。ひるむことなく、どんな戦いをも戦うが、繊細さの面ではひけを取る。粗野な強さだけで決まるものなら、それが関与する戦闘の結末は言うまでもないことである。

このことが示すのは、ドイツ人の方が戦術に優れ、戦いが巧みであったということである。少なくとも理論面についてはそうだ。そしてドイツ人はその理論をこの機会に、きわめて有利に応用したのである。

海の男として、イギリス人はドイツ人よりも優秀である。しかし今日、より優秀な海の男というだけでは足りない。重火器と粗野な力とが、現代科学が教えること全てからの支援を必要とする。船を操ることを知り、自然の脅威を克服できる男は、それだけではまだまだ近代海戦の何たるかを知っているわけではない。完全な巧みさで戦えるためには、この近代海戦を徹底的に知らねばならないのである。

優秀な海の男であることと、船を操れるだけでは不十分なのであり、陸

上での戦いについても幾ばくかは知っていなければならない。ドイツ人は陸戦および海戦をも科学的に勉強した。彼らは自分たちのすべきことを理解している。ドイツには本当の海戦教育大学といったものがある。他より抜きん出ていようとする海軍はこの近代的な科学的な発達手段ならびに、いずれの海軍の基礎を構成するものを備えていなければならない。この海戦はまたしても、科学に導かれた戦争が近代の産物であることを証明している。

海軍力の劣っていると見られる相手を打ちのめすこと、自然の暴威に打ち克つことと、優勢な軍事力を巧みな戦術で弱める術を知っていること、それによって以前は劣勢の艦隊に決戦を行わせて勝利をかつさら；攫うことができるようにすることとの間には著しい懸隔がある。

全イギリス艦隊の最高指揮官、サー・ジョン・ジェリコーが海戦の最終局面で自ら指揮を執っていたというニュースは、少なくともイギリス艦隊の大部分が、ドイツ艦隊の退却以前に戦場に到達していたことの証左である。それは、今日ロンドンから伝えられるように、イギリス艦隊がドイツ艦隊と邂逅していたこと、戦いが最初予想されていた以上にもっと重要であることを明瞭に示している。

イギリス海軍本部報によれば、ドイツ艦隊は海戦の初期段階において数の上で勝っていた。それはビーティ中将が不慣れな状況に自ら進んでいったことによって生じた。ドイツからの報道では、まずイギリスの巡洋戦艦がドイツ巡洋艦によって戦闘に引き込まれたとされる。

しかしながらドイツの戦艦は、イギリス戦艦のうち速度の速いものが戦場に現れる以前にさえ、手痛い打撃をいくつか被ったようである。戦術的な立場からすれば、ドイツ軍にとって火力が優勢で打撃を与えるべき時間が来ていた。そしてシェール総督はどうやらそうしたようである。

ドイツ艦隊が基地に引き返し、最終戦を拒んだという事実については実に多くの喧^{かしま}しい声が聞かれるが、真面目な話、ドイツの艦隊指揮官に何か他のことができたなどとは誰も期待できない。他にどんなことが言われる

にしろ、戦闘が12時間続いたということが事実なら、それがたとえ半分の時間であったにせよ、ドイツ艦隊の戦闘は輝かしく、退却前に殲滅的な打撃を与えたのである。

イギリスの報道のいくつかは、ドイツ軍が有利だったことを率直に認めている。度量の大きいことだが、この事実は手に入る報告から見ても、疑問を差し挟む余地はない。海戦についていくらか知識がある、関心を持つ観察者にとっては、大英帝国はこの海戦で大きな打撃を受けたかのように思える。

ジェリコー提督は、ドイツ軍が撃沈したと主張する「ウォースパイト」を失ってはいないかもしれない。またドイツ軍の巡洋戦艦1隻、現代的なドレッドノート級1隻と戦艦2隻とを沈めたかもしれない、もっともベルリンはこれを今までのところ認めていないが。このことが正しいとしても、このイギリス提督は重大な打撃を食らったのである。ジェリコー提督とその部下は、自分たちが紛れもなく海戦にいたことを知っているのだ。

このようなイギリス側の損失がいくつか重なるだけで、ドイツにとって海が開かれたことを意味し、ドイツ艦隊は本当の海の覇者を決めるために、最終決戦を挑むであろう。大英帝国はその近代的な大戦艦を一隻も失ったことはなくとも、何隻かは明らかに重大な損傷を受けている。特に最初に行動を起こした艦船がそうだ。

時間が経てば、双方の本当の損害が明らかとなろう。認められている損害は双方ともきわめて重大である。

特に興味を引かれるのは、近代的建造様式で重火器を備えた巨大戦艦が実際にどのような役割を果たしたのか知ることである。スカゲラク海戦は世界史において、これまで戦われた中で最大の海戦となろう。このような戦闘での大きなドレッドノート級戦艦の砲火効果はきわめて重要である。これも時間がたてば分かるだろう。

イギリスが巡洋戦艦を3隻失ったことは、この状況下では不思議でもないことを考慮しなければならない。砲撃を受けてばらばらになってしまっ

たのは、ドイツ軍のドレッドノート級戦艦から逃れようと試みた時か、増強部隊が近づくまでドイツ艦隊を引き留めておこうと努力している時のことであった。一番可能性が高いのは、ビーティ中将はドイツ戦艦が近くにいるのを発見したときに脱出を試みたということである。かれは、巡洋戦艦ではドレッドノート級と戦って勝ち目はないことをよく知っていたのだ。

戦闘自体は巡洋戦艦が活躍する場ではない。その任務は偵察活動と大きな距離を隔てた戦闘である。したがってロンドンが認めたイギリス軍装甲巡洋艦¹ 3隻の損失は、合衆国の艦隊のためにこの型の 35 ノット大型船を建造する計画を破棄させることにはならない。わが国は早急にこれらの船が必要なのである。

ドイツ側が破壊したと強固に主張する「ウォースパイト」は一応除くとして、イギリス軍の事実上全戦艦とドレッドノート級が脱出したことは、近代的戦艦がどうしても必要なものであることのこの上ない証左である。それらは、戦闘を開始し、打ち負かすために建造されるのであって、艦隊の中心的なよりどころであり続けねばならない。

ドイツ軍は、艦隊をいわば先導するツェッペリンがあったことで、決定的に有利であったことは疑いない。投入されていた飛行船が2機であったか6機であったかということは、どうでもよい。それらが成功をもたらしたのである。単に有用以上のものであることを、それらは示した。空の巨人が、進行方向を指示したり、ドイツ軍に接近してくるイギリス艦船について絶えず情報を知らせたことを除けば、戦闘そのものに参加した可能性はない。ベルリンからの報告は、別の航空機がその戦闘に加わっていたようなことを言っている。これは、ドイツの大型船のいくつかは最新式の水上新飛行機を搭載するようになっているから、あり得ることである。

ツェッペリンの仕事ぶりが話題になればなるほど、合衆国の艦隊にこの種の操舵可能な飛行船がいくつか必要なことに納得がいく。

1 巡洋戦艦の書き誤りか。

対水雷艇駆逐艦もこの大海戦で有用性を示した。これまで、駆逐艦をもはや建造せず、その代わりとして高速巡洋艦と装甲巡洋艦を使うことが云々されてきた。しかし駆逐艦のこの海戦での闘いぶりはすばらしいものであった。その多くは撃沈され、数千と言わないまでも数百人の勇敢な男達を海の墓場に連れ去った。しかし、この恐ろしい海戦で計り知れぬ任務を果たし、この型の船の有用性を実証したのである。

手持ちの報告からは、潜水艦もこの海戦で良い仕事をしたようである（編集部注：ドイツ側からの報告では、潜水艦は加わっていない）。実際のところ、報道ではいずれかの部隊がしかるべき時に活動に入ったとはなっていない。イギリス軍装甲巡洋艦の沈没は、ドイツ艦隊がいることに気づくのに遅すぎて、退却をうまく行えなかったことに帰される。したがって、この損失はある程度まで偶然によるものであった。

収容所展望

先月の逃亡の企ては、どうやらお手本となってしまったようで、エーベルツ兵曹も垣根を抜けて逃走を図った。彼はそう長く黄金の自由を味わうことはできず、翌日には追跡者の手に捕まった。残念なことに、ニッセン、ケルナー両海砲兵がこの事件に絡んでいた。彼らに対する判決は、近々言い渡される。この企てはまたしても、予防的な警戒措置が強化される結果となった。10時以降は、誰も中庭に出ることができなくなり、垣根に沿って1mの間隔でワイヤが張られ、誰もそれを越えて出てはいけなくなった。私服及び着物はすべて提出を命じられ、その後トランクや箱箱が、その中に隠されているものがないか、あらいざらい調べられた。処遇について、厳格な措置が幅を利かすことになりそうだ。たとえば、もうすでに誕生パーティの犠牲者が点呼の際に欠席したため、喫茶「衛兵所」で数日間の宿泊を科せられた。まあ、ひどくはなるまい。ひょっとしたら近い将来解放さ

れるかもしれないという希望があれば、どんなに耐えがたいことも容易に耐えることができるのだ。

雨の季節が終わった。ほんとうに十分降ってくれた。そのおかげで、気温はなんとか耐えられるところに止まっていた。今は雷雨が頻繁に起き、夜には遠い稲妻がぼおっと照らし出される雲の向こうでひらめいている。日の入りを見ることはほとんどなく、ほんの時たま、夕焼けの色の変化が青島での日没の燃えるような色彩を思い出させてくれる。

富田川²はまったくの市民水浴場と化した。学校が終わるや、水泳に適した場所は、どこも日焼けした腕白小僧たちの一団が泳ぎに来ている。着ている衣服はたいいてい明るい色の着物だが、それを大急ぎで脱ぎ、水泳パンツなど不要、そのまま暖かい水の中に飛び込み、そこで心行くまではしゃぎ回り、帆船やその救命ボートによじ上ったりといろいろな悪さをしている。誰もこの無邪気な行動をとがめ立てする者はいない。それにしても、うちの若者たちは何とみじめなことか。水泳への欲望をありとあらゆる禁令によって制限されているのだから。あのように眺めていると、いっしょにやりたいという気持ちに襲われる。しかし水泳は許されていない。そこでこの前の日曜日のにわか雨の折、初めて冷水浴療法を試みようという連中が中庭にぞろぞろ現れたように、雨を天然の水浴として利用するわけである。

文明の恩恵が徳島にもどんどん広がっている。ガス会社が営業を始めたと思ったら、もうガスが広告に使われるようになっている。アドバルーンが毎日空高く上がり、そこに書かれた文字で驚き顔の市民たちに、一番良い靴下は何かを教えている。夜になると、照明をつぎつぎに変化させて人々の注目を集めている。

7月10日、フンツィカー牧師がプロテスタント教徒のためにミサをあげた。彼の説教は大きく関心を引くものであった。というのも彼は中立国、スイスの人だからだ。今回彼は、戦後において全てのキリスト教徒による

2 現在は新町川と呼ばれている。

共同作業が不可欠であることを説いた。これは、平和が手に取れるほど近づいているのではないかと思わせる説教であった。実際、敵国側が最後の攻撃に共同してあたることによって、戦争に決着を付けようとしているかのごとく思われるのである。

図書室

さらなる寄贈があり、図書は今や 1200 冊を越えるまでになった。
新しい本の中から、次のものを特に取り上げる。

S. ヘディン	武器を持つ民
S. ヘディン	東へ
H. ヴェンデン	私はもはや党派を知らない
H. イプセン	戯曲集
シュタット・ゴッテス（神の町） カトリック月刊誌	
O. ゴットベルク	戦争への勇氣
C. ترام	影
カーライル	働くこと、そして絶望しないこと
F. マウトナー	クサンティッペ
A. オット	ガルミッシュの魔女
ヴェスターマン	月刊誌 1912 年

このほか、横浜在住のドイツ人とオーストリア人からマイヤー百科事典 15 巻の寄贈があった。

第 45 回演奏会

1916 年 7 月 16 日、日曜日

曲 目

- | | |
|-----------------|----------|
| 1. 行進曲「捧げ銃」 | アイルボウト |
| 2. 歌劇『白衣の貴婦人』序曲 | ボワルデュー |
| 3. 「飾らぬ告白」 | トメ |
| 4. ワルツ「沼のバラ」 | ボーゼ |
| 5. 「日本の衛兵の行進」 | フォルシュテット |
| 6. ツーステップ「金のムチ」 | キンレー |

開演 4 時 30 分

第 46 回演奏会

1916 年 7 月 23 日、日曜日

曲 目

- | | |
|------------------------------|------|
| 1. 「パッペンハイムの老人」 1631 年作曲の行進曲 | |
| 2. 『左官と鍵屋』序曲 | オベール |
| 3. 歌曲「乙女よ、紡げ」のパラフレーズ | ネール |
| 4. ワルツ「しゃくなげ」 アンドレ | |
| 5. 蛍の舞曲 | ラ・サル |

開演 4 時 30 分

青島戦（１）

（本日より、上海出身オットー・ヴィージンガー志願兵の戦争日記（ニューヨーク州新聞に掲載）の公開を始める。編集部）

上海を発つ

1914年8月15日に上海から南京行きの列車に乗車したとき、祖国の呼びかけに応じて唯一可能であった陸路を通して青島に赴き、愛する故郷から遠く離れたドイツ文化の前哨基地を守ろうとするドイツ人はわれわれ6人だけになっていた。軍旗の下に馳せ参じたドイツの若者の大多数は、すでにこの月の初めには慣れ親しんだ職場を離れていたのだ。彼らは楽隊と歌で駅から賑々しく見送られた。一人残らず駅に現れたドイツ人がはてしない万歳とフレーフレーの声を上げ、心をこめた握手が彼らに送られ、そして夜中に列車は人々が帽子とハンカチを振る中を出発していった。

南京と済南府へ

今日、列車の出発の際はほんとうに静かだった。だがしかし、家に止まっていた人たちの心はわれわれのために、最初の日の人たちと同じ祖国への感動に鼓動していることを知っていた。敵国の異議申し立てや駅と鉄道の国際的性格を考慮すると強い抑制が絶対に必要であった。別れ行く人と特に近い数人の人だけが、そこに現れていた。9時きっかりに列車は動き始めた。われわれ3人は寝台車の車室でくつろぎ、やがてにぎやかにおしゃべりを始めた。もちろん主題は民族間の大きな争いとヨーロッパでの最近の戦闘であった。同室の者は、ひとりハンプルク・アメリカ航路の船「シキアン」号の航海技術者、もうひとりハンプルクの商社員で、日本に出張中だったのが、戦争の勃発とともに上海に戻らざるをえなくなり、後備兵として召集を受けたのであった。南京に到着したときに、さらに何人かの人が合流したが、彼らもわれわれと同じ行き先であることは容易に察せ

られた。フェリーで揚子江対岸の浦口に渡った後、短時間の滞在後さらに
済南府に向かい、8月17日早朝にそこに到着した。

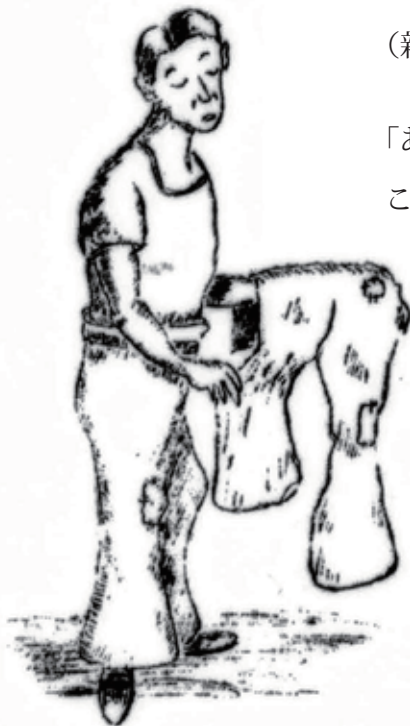
つづく



シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アンツアイ
ガー』第3巻第13号
(1916年7月16日)
ユーモア付録

耽美主義者 (新しい衣服の交付後)



「ああ、僕は
この紫を選ぶんじゃなかった。
この色は年寄りくさい。
さらに言うと、
海緑色のほうが
僕の今の気分に
ぴったり
だったのにな」



ややこしい話³
(故国に送った手紙から)

ここにも一人、靴屋（シュースター）がいる。つまり靴屋（シュースター）はプファイファー（笛吹き）なんだ。料理人（コッホ）のことだけど。シュライバー（書記）というのが料理人（コッホ）で、コッホは靴屋（シュースター）なんだ。

3 ドイツ語の姓（家族名）には普通名詞（特に職業名）から生まれたものが多い。これはそれに絡めた、混乱するような挿話である。

潜水艦「ドイツ」号

(ニューヨーク特派員発)

潜水艦「ドイツ」号が1,000トンの貨物を載せてアメリカに到着した。世界中が仰天している。ジョン・ブルは怒りに猛り狂っている。イギリス人の顔がまたしてもかなり長くなってしまったために、イギリスの理髪店はまたもや髭剃りの値段を上げなければならなくなった。「沈黙の大艦隊」のすばらしい封鎖をまさに虚仮^{こけ}にするにふさわしい野蛮人のこの新たな卑劣な行為で怒りに打ち震えながら、イギリスでは徹底的な防御策に脳みそをしぼっている。すでにロンドンの警備会社の全員に潜水服を着せて、海底に送り込んだ。そこからジェリコー提督に潜水艦がいることを電話で伝えようというわけである。しかし残念ながら、これは実現できなかった。というのも海底では歩くたびに、沈没したイギリス艦の残骸にすねをぶつけて出血したからである。そこで潜水艦に自分の行く先を見つけられないように、大西洋の水をインクで曇らせようとした。しかし、その前に完全に度を失ったわけではなかった人々が、戦争を遂行する上でイギリスにはインクが不可欠であることに気がついた。そこで、海底に「ニューヨークはこちら」と書いた道しるべを立てようとしている。実際にはこの行き先はイギリスの軍港なのだ。しかしこれは、海軍大臣がハイドパークでの国民集会での演説で強調していたように、当面のあいだ極秘事項なのである。しばらくしたらドイツの潜水艦が大挙してドーヴァー、プリマスなどに入港してくることをイギリス人たちは期待している。しかしそれでも、こやつの中の一隻が本当に無傷でアメリカに到着したという、

きわめて不愉快な事実には残念ながら変わりがないのである。おまけに 1,000 トンもの貨物を積んでいたのだ。この貨物の中味は、まず化学薬品で、ウィルソンのためのアスピリンとヴェロナールで、悪いドイツ人によって絶え間なく引き起こされる頭痛と眠れぬ夜のための薬である。ルーズヴェルトには、ドイツに敵対する扇動演説で叫びまくって起こしたしゃがれ声のための薬。染料は、イギリス系アメリカ新聞が是非とも必要なもので、これから先も戦争報道で協商側に立った色づけをできるのである。またウィルソンのために、かなりの数量の文書用紙が荷揚げされた。彼はすぐさまこの機会を捉えて、何トンものドイツとオーストリア向け文書を帰路に発つ潜水艦に托したのである。注目すべきは、この文書はすべてかなり友好的雰囲気をもつものである。なぜなら彼は、新しい潜水艦業務の助けを借りて、対メキシコ戦争に緊急に必要な武器と火薬をドイツから買えるのではないかと期待しているからである。アメリカの火薬工場は残念ながら目下のところ別の方面に向ける仕事で忙しいのだ。ドイツは友好的なアメリカが困っているときには、もちろん見捨てたりはしないであろう。

確かな筋からの情報によれば、「ドイツ」号は徳島の捕虜向けの数百袋の郵便物を運んできたとのことである。